



賢者の転生実験

東国不動
TOUGOKU FUDOU



ヴァスコ

アーティファクトを
売買する大商人。
ルドルフとは古くからの
友人。

ミラ

グマンの森にある
獣人村の代表者。
妖艶な姿だが、
実はかなりの高齢。

ルナ

グマンの森に住む猫型獣人
のクールな女の子。
レオに想いを寄せる。

マリー

レオの双子の妹。
動物と話したり、
魔法を駆使したりと、
驚くべき才能を発揮する。

クリスティーナ

レオの母親。
元王女様だが、
ルドルフを追って
駆け落ちした。

レオ

大賢者ルドルフによって転生
させられた少年。
膨大な魔力を持つが、
コントロールができない。

ルドルフ

レオの父親。世間からは
大賢者と呼ばれる。
政争に敗れて隠遁生活
を送っている。

1

トラックが突っ込んでくる。

少女が轢かれそうになっていた。

そう、少女を助けるために駆け寄って突き飛ばしたら、逆に自分が轢かれてしまったのだ。
何となく思い出してきた。

でもおかしい。自分は決してそんなことをする人間ではなかったはずなのだけれど。人間の本性は死ぬ間際に出るという話も聞いたことがある。これが自分の本性だったのだろうか。

それとも、何か他の特別な理由があったのか……よく覚えていない。

正確には、覚えていないというよりも、思考が纏まらないから「分からない」のだ。

自分は今、何やら暗いところを漂っているようだが、それが何処であるか明確には認識できない。
この暗さに、永遠に続く闇に、思考が、いや自分の存在がまるごと溶けてしまいそうになっている。

ああ、なるほど。これが「死」なのか。曖昧な意識で「それ」を受け入れはじめている自分が恐ろしかった。しかし、今の自分には死という永遠の闇に抗うための確かな道標が何もない。

そんな時、急に現実感があるというか、温かみのある生身の声が聞こえてくる。

「お。やっと交信に成功したみたいだ。そこにどなたかいますよね？」

声が聞こえてくるというよりも、魂に直接響いているという感覚だろうか？ この声を失ったら自分の全存在が消えてしまうような気がする。早く答えなければならぬ。

「い、いる……」

「お、ちゃんと返事ができるみたいですね」

死後の世界で自分に話しかける存在。ひょっとして――

「あなたはかみさま？」

「神様？ あゝなるほど。そう解釈しましたか。でも違います。僕は世間からは“大賢者”と呼ばれていますよ」

神様かと思っただけで、違うらしかった。だが、賢者でも誰でもいい。助けて欲しい。

思えば、自分が過ごした人生は決して楽しいものではなかった。むしろ辛い人生だった気がする。それなのに、どうして死にたくないと思うのだろうか。何か大切な理由があるのか、それとも生物としての本能なのか……思考が纏まらず、今の自分にはそれすらも分からない。

「たすけて」

「あーはい。私はそのつもりですから安心してください。でもその前に教えて欲しいのです。貴方は僕とは違う世界の魂であるはずです。そちらの世界では魔法技術はどのように発展していますか？」

魔法？ 魔法技術なんてあるわけがない。

「まほう……ない」

「何ですって？ 魔法がないのにどうやって敵から身を守っているのですか？ 私の考えでは、どんな世界であれ、言語を持つほど知的な生物になると、生存競争をするための身体的な能力は他の生物よりも劣るようになると思うのですけど？」

この暗闇の世界の道標は謎の声だけだ。必死に答えようとするが、うまく言葉を紡げずに、どうしても拙い返答になってしまう。

「ふむ」

「なるほど。貴方の世界では武器が発達したのですか。よほど凄い剣や弓があるんでしょうね」

この人は何を言っているのだ。剣や弓だって？ 中世でもあるまいし。

「じゅう。せんしゃ、せんとうき、いーじすかん、かくみさいる、れーるがん……」
いけない。思考がさらに混濁していく。

レールガンなんてものは実際の兵器としてはまだ運用されてないはずだ。研究自体はされているし、実験も成功していたと思うが、実用化しているのはアニメやラノベの世界の話だろう。

「かくみさいる？ れーるがん？ より詳しい説明を求めます」

何やら謎の声に訊かれるままに説明している気がするが、もう自分が何を話しているかも分からない。それでも、すがりつく思いで自分が知るかぎりの知識を披露し続けた。

「なるほど。素晴らしい……。たまたま交信に成功した死にゆく魂のいた世界が、これほど科学技術に優れているとは思いませんでした」

今、自分を助けることができるであろう唯一の人物から高評価をもらえたようで、少しほっとした。その一方で、既に自分の存在が消滅しつつあるのを感じる。

「おっと。申し訳ありません。時間を使い過ぎたようですね。先ほど少し申し上げましたように、私は貴方を助けることができます。私が開発した「究極魔法」で貴方を「転生」させることができますと思うのですよ。……きりゅう・れおくん？」

転生だって？ ひょっとして小説とかでよく出てくるあの転生だろうか。

「魂の状態でここまでの確に受け答えできるということは、貴方がとても聡明な証です。どうも貴方はそちらで不幸な生涯を送られたようですが……、私個人としては、是非とも転生して頂きたいと思っています。ただ……」

褒められたことは素直に嬉しいし、今にも消えそうな自分としては転生の提案はありがたい。だが、何か奥歯に物が挟まったような言い方が気になる。

「ただ、この転生の秘術はまだ実験段階なんです。そこで、万全を期すために魂が入る前の胎児に貴方の魂を導きます。ちなみに、その胎児は僕の子供です。つまり、貴方は僕の子供になる、ということですが、どうでしょう？」

転生の提案だけでも驚いているのに、謎の声の人物が親になるって？ 人の一生において親の比重は物凄く大きい。ある意味では、親が人生を決定付けるとも言える。この謎の人物が親で良いのか、曖昧な意識の中では判断できない。

「あ、そうだ。子供は双子になるということも魔法で分かっています。男の子と女の子ですから、

性別を選ぶこともできますよ」

それも早く言って欲しい。重要な問題じゃないか！ でも、もう本当に意識が……

「わわわわわ。どちらの性別が良いかなんて悠長に聞いている場合じゃないみたいですね。とにかく転生したいかどうかだけ答えてください」

貴方は転生しますか？

はい↑

いいえ

2

ここは何処だろう。消滅せずにすんだのだろうか。
相変わらずの暗闇で視覚は全くはたらかないし、その他の感覚もあまりない。全ての感覚が鈍くなっているような気がする。

分からない。分からないけれども、死の間際に体験したあの暗闇と違って、何だかここはとても安心できる。全身が温かいものに包まれている気がした。

これは命なのか……？

とてつもない安心感。直感的に、命に包まれていると感じる。

そうだ、自分は謎の声に導かれたのだ。双子の子供の一人に転生するかどうかと尋ねられて……何をどう答えたかも覚えていない。しかし、あまりにも安らかな感覚に、自分が死んだとは思えなかった。

本当に謎の声の人物による究極魔法とやらで転生したとすると、もしやここは母親の胎内なのか。この安心感の理由は母胎にいるからだと考えれば納得できる。

そして、すぐ近くにもう一つ、母とは別の温かい存在を感じた。ひよつとして、謎の声が言っていた双子の片割れなんだろうか？

そういえば謎の声は、男の子と女の子どちらに生まれたいかとも聞いてきた。自分は一体、男になったのだろうか、女になったのだろうか。

もし自分が男なら、近くにいる存在は姉か妹になる。逆なら兄か弟だろう。

そもそも自分は元の世界で男だったのか女だったのかも、今は思い出せない。それすらも曖昧なのだ。

でも、ここはとても心地が良いので、どちらでも気にならない。とにかく安心できるのだ。

「ねえ。双子なのよね？」

形容しがたいほど優しく、美しい声が聞こえる。もし女神がいるとしたら、こんな声なのだろうか。いや、きっと本当に女神なのだろう。

「うん。魔法で確認したから間違いないよ。前にも言ったけど、男の子と女の子さ」

この声はあの時の謎の声だ。謎の声と女神が話している。

「素敵ね。名前は決めてあるの？」

「うん。男の子はレオって名前にしようと思っている」

……れお。懐かしい響きだ。前にそんな名前と呼ばれていたような。確か……きりゅうれお。これが自分の名前だとすると、自分は男として生まれるのだろうか。

「レオ。珍しいけど、良い名前だと思うわ。女の子は？」

「うーん。そうだなあ」

「もう。男の子にしか興味がないの？」

女神は拗ねるような声を出したが、その声はあくまでも優しくかった。自分をここに導いた謎の声が言う。

「ちよつと考えてみるね」

女の子の名前。何か重要なことを思い出せそうな気がする。

「そうだなあ。女の子の名前は……マリーでどうだい？」

「うん。とっても良い名前よ」

マリー。隣にいる命の名前はマリーというのだろうか？

「レオ、マリー、早く元気に出てきてね」

女神の声を聞きながらこの上ない多幸感に包まれていく。

「二人ともきつと凄い魔法使いになるぞ」

「そうね。なんといっても大賢者様の子供なんですもの」

二人とも凄い魔法使いになるだつて？

「大賢者って呼ぶのはやめて欲しいなあ。何か年寄りみたいだし」

「ごめんなさい。王宮でアナタから魔法を教わっていた時の習慣でつい……」

魔法を教わる、ということは……自分は魔法が身近に存在する世界の胎児に転生してしまったのだろうか。確かに、あの時の謎の声も魔法がどうこうと言っていた気がする。

「♪♪♪」

本来なら驚くべき事態であったが、女神の子守唄を聞くとそんなことはどうでも良くなってしまう。

たてえようなない安心感に包まれて眠りに誘われた。



眩しい。それに乾いている。そして少し寒い。ここは何処だ？

どうしてあの安心できる場所からこんな薄ら寒いところに出すんだ。俺は必死に抗議の声を上げた。

「おぎやーおぎやー」

なんだこれ。声がうまく出せない。泣き声になってしまふ。

あ、ひよつとして俺は赤ん坊として生まれてしまったのだろうか？

「ふぎやーふぎやー」

隣りから自分よりやや甲高い泣き声も聞こえる。

「賢者様、賢者様、起きてください。元気なお子様ですよ」

お婆さんらしき声が誰かを起こそうとしている。ひよつとして誰か出産を手伝っているのだろうか。確認したいけど目は見えない。

「う……ううん。ほ、本当かい!？」

「もうルドルフったら気絶しちゃうんだから。私達の子供は二人とも元気よ」

謎の声と女神の声が聞こえる。

私達の子供——彼女がそう言っているということは、つまり女神の声は俺の新しい母親の声だったのか？ 本当ならすぐに気づくことだったと思うけど、どうやら胎児の時は思考力が著しく減退していたようでそこまで思い至らなかった。

そして、今聞こえるこの謎の声は究極魔法によって俺を地球から自分の息子に転生させた大賢者と呼ばれている人物なのだろうか？ ん？ ちきゅうって何だっけ？

「ごめんね。僕は血に弱くて」

「いいのよ。それよりもレオとマリーを見てあげて」

視界に何やら大きな影が覆いかぶさる。

「可愛いね。でもどっちがレオでどっちがマリーか分からないよ。とりあえず男の子のレオはどっちなんだい？」

母胎にいる時もあったが、レオはきつと俺の名前だ。

賢者よ、とりあえずこの状況を一から詳しく説明してくれ。そう必死に伝えようとするが――

「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー」

――泣き声にしかない。

「うふふ。男の子なのに泣き虫の方がレオよ」

違うって女神。いや母さん。泣きたくて泣いているわけじゃない。どうして分かってくれないんだ。

「おぎゃーおぎゃーおぎゃー」

アレ……俺は何を考えていたんだっけ？ 赤ん坊は胎児より幾分マシかもしれないが、やはりうまく頭がはたらかない。成人と比べて思考力が低いことは同じなのだろう。ともかく泣いてやる。

「レ、レオが泣き止まないよ。ど、どうしたらいいの？」

早く気づけ、何だか分からないけど俺の不満に気づいてくれ。

「もう。お父さんはダメね。ルドルフ、レオを私に貸して。そつとよ」

「ああ、うん。王女様」

え……王女様？ 母さんのことなのか？

ゴツゴツした感触の場所から優しく温かいふんわりとした感触の場所に移される。

そうだ。俺はこの安心感が欲しかったんだ、と思う。もう泣き止まなきゃ。

「もう。私のことを王女とは呼ばない約束じゃない？」

「あ、ごめん。つい王宮でクリスティーナに魔法を教えていた時の癖で」

賢者は昔、王宮で母さんに魔法を教えていたのか？ その母さんは王女様って呼ばれていて……それって凄く重要な情報じゃないか。でもどうしてそれが重要なんだっけ？

「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー」

考えが纏まらず、俺はつい泣き叫んでしまう。

そうすると、先程から近くに気配を感じる温かい存在も呼応するように泣きはじめる。

「ふぎゃーふぎゃーふぎゃーふぎゃー」

「よしよし。いい子ね。レオ、マリー、泣かないの」

この声を聞くと何故かとても安心できる。俺はようやく泣くのをやめることができた。

「お父さんがよほど怖かったのかしら。大丈夫よ。二人のお父さんは血を見たら気絶しちゃうような人なんだから。うふふ」

「ごめん……でも静かになったみたいだね。よし。もう一度レオを貸してくれないかい」

俺はふんわりした感触の場所から再びゴツゴツした感触の場所に移される。少し機嫌が悪いが、泣き叫ぶほどのことはない。我慢してやるか。

目が見えないから分からないが、身体に伝わる振動から考えると、どうも俺を抱えたままどこかに移動しているようだ。賢者が「よし、よし」などと言いながら俺を上下させる。

眩しい。ベランダだろうか、どうやら部屋の外に連れていかれたようだ。俺は一発泣いてやろうかと思う。その時だった。

「キリュウ・レオくん。新しい名前はレオ・コートネイになるわけだけど分かるかい？」

何を言っているんだろう。しかし懐かしい名前だ。キリュウ・レオ。きりゅうれお。

桐生レオ……あっ!!

俺は日本から転生したことを思い出す。そしてこの賢者が謎の声の主で、今の俺の父親。

俺は賢者の究極魔法とやらで……あれ、究極魔法って何だっけ？ 日本って何だろう？

「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー」

「ああああああ。泣かないで。よしよし、ちゃんと説明するから」

賢者は俺を揺らしたり擦^{こす}ったりしながら語りだした。

「究極魔法は死を超越する魔法さ。概念としては昔からあった転生の秘術^{ミジュツ}を僕が成功させたんだ。

本来は自分が死んだ後に、生まれながら魔道知識最強の状態^{キョウタイ}で復活^{きふく}することを企図^{きと}したものなんだろうけど、僕はそれをさらに改良した」

何かとても重要なことを言われている気がして、俺は泣くことさえ忘れて聞き入った。

それにしても、賢者は「おぎゃー」しか言えない俺の言葉がどうして分かるんだろう？

「ともかく、僕はこの究極魔法を、肉体から離れた自分以外の魂——つまり別人の魂を使って発動させることにした。しかも別世界の魂にね。目的は異なる世界の魔法技術を手に入れるためさ。君の世界では魔法ではなく科学^{かがく}って言うんだよね？」

大事なことだと感じるのに、賢者が何を言っているのかさっぱり理解できない。

「魂の継承に成功しても、君はまだまだ赤ん坊だから脳が発達していないんだよ。まあこの辺の概

念も君から得た知識^{ちしき}なんだけど。三歳ほどで通常の思考ができるようになると思う。ただ、ひよつとするとそれまでに前世のことはすっかり忘れてしまうかもしれない」

そうだ。俺は何か重要なことを忘れている気がする。

「そうすると僕は困る。幸い君にはうまく読心^{どくしん}の魔法がかかった。今もそれを使って何とか君と会話を成立させているんだよ。これからは、君が魂の時に教えてくれたそちの世界の知識を僕が一方的に話しかけるようになるから、君はそれをもとに少しでも前の世界の情報を忘れないようにして欲しい。とくに技術的な知識が重要だ」

よく分からないけど、物凄く勝手なことを言われているような気がするぞ。ええい、泣いてやれ。

「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー、おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー」

「お、おいおいおい!? よしよし」

どうだあ。効いている効いている。

「ちよつと、ルドルフ? どうしてそんなにレオは泣いているの?」

「あ、いや違うんだよ。アハハハ」

母さん、違うないぞ。もっと泣いてやれ。

「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー、おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー」

「わわわわわ。分かったよ、レオ。これは君にもいい話なんだって。君の知識と僕の魔法を融合させる。そうすれば今までの魔法技術体系とは一線を画した最強の魔法群ができるはずなんだ」

そんなことが可能なのか? いや、できるのかもしれない。この賢者は転生の究極魔法によって

死すらも超越したのだから。

俺もそんな魔法が使えたらなあと思う。

「うんうん。レオにはそれも含めた魔道の奥義を大賢者と言われる僕が教えてあげるから。良い取引だろ」

俺は魔法について何も分かっていないが、賢者の提案に納得した。

「あゝあゝあゝ」

「笑っているよ。我が息子ながら現金な子供だな」

近くに人の気配を感じる。

「まあ、泣いていたのに、もう笑っているわ。生まれたばかりなのに笑えるなんて、レオは凄く賢いのね」

「あ、クリスティナ。もう歩けるのかい？」

俺は再びふんわりとした感触に包まれる。母さんに抱かれた。

きつとすぐ近くにはマリイもいるのだろう。

俺は母の手の中で穏やかな幸福感に満たされ、やがてまじろみに落ちていく。

3

眠りから目が覚めた。

「おぎゃーおぎゃー」

やっぱり自分はまだ赤ん坊のようだ。

そういえば、生まれてから何ヶ月が経ったんだろうか。

「五ヶ月だよ」

父——と言っているのだろうか、俺を日本から転生させたルドルフがそう教えてくれた。

「父と言っているんだよ？ 君の世界の知識で言えば遺伝上もそうだよ」

そんなもののなのだろうか。ともかく、五ヶ月も経つと思っても少しは安定してくる。

そしてついに目が見えるようになってきた。

今はゆりかごに揺られているらしい。

ゆりかごは気持ち良いが、側面の布地が邪魔をして、俺には天井しか見えない。

「おぎゃーおぎゃー」

「はいはい、分かったよ」

泣いて不満を訴える俺を、ルドルフが持ち上げる。

世間では“大賢者”と呼ばれている人物が暮らす部屋の全景が見えるようになった。

前世の言葉で言うならば木造のバンガロー、あるいはキャンプ場のコテージといったところだろうか。そこそこの広さはあるが、大賢者などと言われている人物の住居としてこれでは少し貧相な気がする。

「ボロっつい家でわるかったねえ。言っておくけど、ちょっと前までは王宮に住んでいたんだよ」
転生した俺にしてみれば、今王宮に住んでいてくれなければ何の意味もない。

まあ、どうやらルドルフは「アーティファクト」と呼ばれる魔法の道具を売ってそれなりに儲けているようなので、生活に困っている様子はなかった。打算的な話だが、ルドルフの子供になった俺もカネに困ることはないようなので安心だ。

何にしても、家の中はつまらない。ベランダのウッドデッキに連れて行ってもらおう。

「はいはい」

ルドルフは俺を抱えてバンガローのウッドデッキに出た。

目の前に素晴らしい光景が広がる。

俺は我が家から眺める外の景色が好きだった。

我が家は小高い丘の上にあるので、ウッドデッキからは何処までも続く緑の山々が見える。

こういう感じの山景は日本では見たことがない……と思う。

断定できないのは、日本での記憶が曖昧だからだ。一般的な知識は覚えているのに、何故か自分のことに関してはすっぱり記憶が抜け落ちていくような感じだ。

これから成長するにしたがって思い出していくのだろうか。それとも、逆に完全に忘れてしまうのだろうか。今の俺には分からないが、そんなことが気にならないくらい、この景色は素晴らしい。

季節は――

「今は夏だよ」

夏らしい。木々の葉や草の匂いのなかに僅かに花が香る。夏とは言っても、標高が高いから風は涼しい。

この心地良さを満喫していると、前の世界のことは忘れても良いのではないかと思える。

「いやそれは困るよ。例のイーリス艦のイーリス・システムについて教えてよ。心の中で考えるだけでもいいから」

この大賢者様は人に勝手に読心の魔法をかけて、兵器を主とする科学技術のことばかり聞いている。

全くひどい話である。

「だってレオが話せるようになるまでに前の世界の科学知識を忘れてしまったら、元も子もないだろ？ 読心の術はレオの知能が高くなれば自然と効かなくなるし、レオにも科学知識と魔法を融合させた全く新しい魔法群を教えてあげるからさ」

全く新しい魔法群と言われても……そもそも普通の魔法すらできないのに。

それにしても、ルドルフは兵器や科学技術のことにしか興味がないのだろうか。たとえば前世の俺の一生とか、親なら少しは興味を持っても良いと思うが。

「レオが魂の時に少し聞いたけど、あまり楽しい人生じゃなかったみたいだからね」

……やっぱりそうなのか。何となくそんな気はしていた。少なくとも若死にしているわけだしな。「うん。どうやら君は「こーこーせい」という時期に死んでしまったようだよ。こーこーでも良い思いはしてなかったようだね」

高校生か。トラックに轢かれて死んだような記憶だけは今でも残っている。

「魂だった時にレオから聞いて知っていることを話そうか？」

いや話さなくていい。これからの人生を楽しむ方がよほど重要だ。

「そうだよ。それは僕も同意するね」

数ヶ月の付き合いで分かったが、大賢者と呼ばれているルドルフも決して順風満帆な人生ではなかったらしい。

まあ、過去のことはいい。あの時、俺はルドルフに賭けた。転生したいと答えたんだ。答えた記憶はないけれど。

俺はルドルフの転生の究極魔法によって、新しい生を満喫しようとしている。

「ただいま。レオは泣かなかった？」

「あ、おかえりくристиーナ」

女神の帰還だ。俺の母親クリ스티ーナ・コートネイという。時々ルドルフが王女と呼ぶ人。事情は少しだけ聞いている。

ただ、それよりも今は彼女の容姿のほうが重要だ。何と言っても元々女神のように美しいクリ스티ーナが、湯上がりでさらに色っぽさを帯びているのだから。

陽光に映えるブロンドの髪、グレーに少しブルーが混じった瞳、すっと通った鼻筋、誰もが口づけをしたくなるだろう艶のある唇。

心のなかでクリ스티ーナを褒め称えていると、ルドルフがそれを遮った。

「じゃあ今度は僕達が行つてこようかな」

この近くには温泉があるので、時々風呂に入れてもらえるのだが、クリ스티ーナはマリーの入浴を担当、ルドルフは俺の担当という型ができてしまった。

たまには逆にしてくれても良いのに。

どうやらルドルフは俺がクリ스티ーナと一緒に風呂に入るのを邪魔しているようだ。くそ。

「おぎゃーおぎゃー」

駄目だ。不満を言おうとしても泣き声になってしまう。ルドルフの奴が笑っている。

クリ스티ーナが俺をルドルフから取り上げた。

「あらあら。お腹が減ったのかしら。行く前にもあげたのに。はい」

俺の不満を誤解したクリ스티ーナが乳房を出す。あまりお腹は減っていなかったが、すぐに飛びつく。

ルドルフのしかめっ面が見えるぞ。ふふふ、勝った。

今でこそ、こうしておっぱいを飲んでいる俺だが、最初は恥ずかしくてモジモジしていたものだ。結局、空腹には耐えきれず、一度堰を切ったら、それ以降は至福の時間になった。

だってお腹は減るし、これしか口にできないんだから仕方ない。

クリ스티ーナは今十八歳らしい。元の世界の俺と二―三歳ぐらいしか変わらないだろう。そんな美女から授乳されるなんて……

ちなみに、ルドルフは大賢者とか呼ばれているくせに、まだ二十八歳らしい。

俺が母を求めるのは決してそういうエロい(?) 考えがあるからだけではない。妹のマリーと一緒にクリスティーナに抱かれると、言いようのない多幸福感に満たされるのだ。

妹のマリーは本当に可愛い。今はまだ赤ん坊としての可愛さしかないが、母クリスティーナは女神のような美しさだし、ルドルフもまあイケメンと言っている顔立ちなので、マリーは将来きつと凄(すご)い美人になるに違いない。

「姉(姉妹)かもしれないけどね」

「え? ルドルフ何言った?」

俺の心を読んで答えたルドルフに、クリスティーナが不思議そうな顔をしている。

「あ、何でもないよ」

ルドルフは出産の際に気絶してしまい、クリスティーナはクリスティーナでそれぞれどこではなかったため、マリーが姉であるか妹であるかは実は誰にも分からない。

父も母もちよつと抜けている家族だった。出産を手伝ってくれた人に聞けばいいのに、と思ったがクリスティーナが「この子達が決めればいいじゃない」と言っているのを止めたらしい。

それでもいいけど、事実は事実として別に存在するような気がする。二人とも常識知らずというか、浮世離れしているというか。まあ、それでも俺はこの家族が大好きだった。

俺はこの家族と異世界で新しい人生を送るのだ。



俺はルドルフの背におぶわれて、我が家が建っている丘の上から麓(ふもと)の方へ下りている。

「ちよつとレオと散歩に行ってくるね」

ルドルフはクリスティーナにそう嘘をついた。本当は俺の初めての魔法訓練に行くのだが、まさか生後七ヶ月の赤ん坊が魔法の訓練をするとは言えない。魔法か……楽しみだ。

「あいあうあー」

「はいはい。よかったね。レオにはいつも話しかけているからか、思考力はもうほとんど大人と変わらないみたいだし。魔法を試しに使ってみるのもいいだろう」

七ヶ月間、俺はこの異世界生活の中でずっと魔法を見てきた。

薪(まき)を割ったり、薪に火をつけたり、夜道を歩くための灯火(とうか)を作り出したりするのに、両親が何かと魔法を使っていたからだ。

ルドルフが得意とするアーティファクトの作成などにも魔法は使われているのかもしれないが、それはまだ俺には分からなかった。

ルドルフは丘の麓にある森の中に分け入り、やがて足を止めた。

「よし。ここでやろうか。この距離ならば、万が一レオが小さな魔法を発動できたとしても、クリスティーナに感知されることもないだろうしね」

ルドルフによれば、魔法を使う者は常に辺りで魔法を発動させた者がいないか、魔法を使おうと準備している者がいないか感知しようとしているらしい。魔法の威力に対して人間の耐久力は大きく劣るため、誤って魔法に巻き込まんだり、逆に巻き込まれたりしないように、常に注意を払ってい

るのである。

人は銃弾——小さな金属の塊——が命中するだけでも死んでしまう。同じように魔法の場合も、それが初歩的なものでも、直撃したら人を死に至らしめることがある。

薪を割る程度の魔法でも当たりどころが悪ければ死ぬし、そうでなくても重傷を負うことが多い。それを防ぐ方法は二つ。魔法の発動に必要な魔力の集中を事前に感知して避けるか、対抗する魔法で防御するか。そのどちらかだ。

その辺の詳しい話は置いておくとして、母クリスティーナも魔法使いとして優秀なので、相当離れないと小さな魔法でも感知されてしまう可能性があるのだ。ルドルフはそれを警戒して、わざわざ我が家から麓に降りるまでの一本道からかなり離れた森の中に来た。

「じゃあレオ、この綺麗な岩の上に降ろすね。少し離れた地面に万年樹の杖を刺すから、それを目標に何かの魔法をやってみてよ」

ルドルフは俺を岩の上に置いて逃げ出した。素人の魔法は何処に飛んで行くか全く分からない。赤ん坊を冷たい岩の上に置きっぱなしにして離れたのはそのためだ。

「まあ最初のうちは才能がある人でも詠唱が必要だから、できないだろうけどね」

その話は何度も聞かされている。魔法を一言で言えば、魔力をイメージによって現象に変換したもの——とのことなのだが、一度も魔法を使ったことのない人が魔法をイメージするのは難しいらしいのだ。逆に一度でも成功すれば、イメージするのも簡単になる。

自転車に乗ることに近いのだろうか。乗れるようになるまでは凄く難しいが、一度乗れてしまえ

ば当たり前のように身体が動くあの感覚だ。話を聞いていると自転車よりは難しいようだが。

また、魔法は危険なものでもあるので、慣れないうちは無意識にブレーキをかけてしまうらしい。そのため、初心者はいわゆる魔法の「詠唱」と呼ばれる作業をおこなう。

詠唱には大きく分けて二種類ある。一つはそれ自体に霊的な意味を持つ古代言語を組み合わせ、魔法効果を発揮させるものだ。

切断の意味を持つ言葉「シャー」と風の意味を持つ言葉「ブー」を合わせることによって、薪割りによく使われるウインドカッターの魔法になる。

古代言語による詠唱を使えば、イメージ化をうまくできなくても詠唱通りの魔法が発動するため、それで魔法を使う感覚をつかめる。

ただ、古代言語の詠唱によって有効な魔法を発動するには、範囲や方向なども古代言語で指令しなければならない。そのため、古代言語で魔法を行使するのは意外と手間で、時間もかかる。

その上、古代言語は魔法のイメージ化を阻害することもあるので、もう一つの詠唱法を使う者も結構多いらしい。これはイメージ化の精神集中のための詠唱で、俺は勝手に「ちょっと恥ずかしい詠唱」と呼んでいる。

爆炎系の大魔法に「ギガエクスプロージョン」という魔法があつて、それを得意としていた高名な使い手の詠唱は余りにも有名だ。父や母や客人がその話をしているのを聞いたことがある。

『汝らを誘うは灼熱の狂宴、地獄の業火に焼かれるがいい……』

最初しか覚えていないが、この手のフレーズを五分ほどひたすら唱えながら、精神集中をおこな

うらしい。ちょっと恥ずかしい、日本でいうところの中二病的な詠唱だ。

——話を戻す。

まだ俺は「あうあうあー」とか「おぎやー」しか言えない。つまり詠唱できない。だからルドルフは「レオには魔法なんてまだできないよ」と言っているのだ。

「まあできないと思うけど、フアイアボール」でも杖に飛ばしてみたら。薪に火をつけたり、夜に灯り代わりに使っているから、レオもよく見ているでしょ？ イメージしやすいはずだよ」

くそ。やってやろうじゃないか。要はアレだろ、火であの杖を吹っ飛ばす攻撃をイメージすればいいんだろ。どうせなら森を火の海にするぐらいのつもりでやってやろうじゃないか。ギガエクスプロージョンはそれぐらいの威力があると聞くし。

うん……何だか体にエネルギーのようなものが集中している。できそうな気がする。

何故かルドルフが声をあげた。

「え？ そんな……いけない！」

フアイアボールなんてケチなことは言わない。

「あうあうあー（ギガエクスプロージョン）」

刹那、暴風が全身に吹きつけ、赤ん坊の俺はボールのように岩から転がり落ちた。

痛てて、何の風だ？

打撲痛が収まると、それがただの風ではないことに気がついた。焼けつくような熱を帯びた風だ。熱風に耐え、なんとか目を開けた。

どういうことだ？ ルドルフが目標として地面に刺した杖など跡形もない。杖から向こうは遠く

まで爆発があったように扇状に緑が消し飛んでいて、その範囲の外は文字通り火の海になっていた。

その衝撃的な光景に、おぎやーと泣くことも忘れる。

ま、まさか。これを俺がやってしまったのか。

魔法の余波で辺りに飛び散った火を巻き込みながら、火の海はどんどん大きくなっていく。完全に山火事になっていた。

麓に下りるための一本道も……完全に火に吞まれた。

何てことだ！ このままでは、丘の上にある我が家が。

「おぎやー！ おぎやー！ おぎやー！（あああああ！ マリーがあ！ 母さんがあ！）」

俺はひたすら泣いた。マリー、母さん。どうすればいいか分からない。その隣でルドルフも嘆いていた。

「ま、万年樹の杖が……聖域の森でやつと見つけたのに……」

万年樹の杖だつて？ この糞オヤジ！ 杖なんか気にしている場合か！

「あ、そうだよ。早く消さなきゃ。この規模ならクリスティーナでも対処できると思うけど」

え!? 母さんはこんな山火事すら消せるのか？

「ノアフオード」

突然何言っているんだこの馬鹿は。ノアの洪水だつて？

そう思うのと同時に俺は濁流に吞まれていた。

何だこれえええ。溺^{おぼ}れるううう。がぼぼぼぼぼ。
流される俺の服を何者かがガシツと掴^{つか}んだ。

誰かの手はそのまま水面の上に俺を持ち上げる。ルドルフの手だった。
ぶはっ！

俺やルドルフがいた付近の水深は精々^{せいせい}成人の太ももぐらいまでだったが、山火事が燃え広がる
としている辺りには、ビルほどの高さのある水の壁が渦巻いている。

「お、おぎゃー……」

これが大賢者の魔法の威力かよ……。こうして目の当たりにしても信じられない。

「いや僕の方が信じられないよ。赤ん坊の魔法の威力がこんなに凄^{すご}いなんて。しかも全くの無詠唱。
魔力集中のスピードも速い」

そ、そうだ。この事態は俺の魔法が起こしたものだっただ。

何てことをしてしまったんだろう。

「火は僕が消したからいいじゃない。……万年樹の杖が消し飛んだのは痛かったけどね」

そういうもんなのか。ルドルフはぶつぶつと呟^{つぶ}いていた。

「膨^{ぼうだい}大な魔力は僕とクリスティーナの遺伝かな。魔法に対する精神的リミッターが働かないのは、
魔法が存在しない世界の記憶や常識を引き継いでいるのが、プラスにはたらいたのかも」

リミッターが利いてないとか、まずいんじゃないの？

「威力を出せないよりはいいよ。抑える方法もあるだろうしね。普通は威力を高めるためにみんな

苦勞しているんだから、贅沢^{ぜいたく}つてもんだよ」

あわや大惨事だったにもかかわらず、ルドルフはしきりに感心していた。いいんだろうか。

「ともかく凄い才能だよ。初めての魔法が無詠唱のギガエクスプロージョン。しかも生後七ヶ月の
赤ん坊がだよ。これは魔法史上の事件だ」

そこまで褒められると、何だか少し嬉しくなってきた。

とりあえず俺にも魔法はできた。しかもただの魔法ではない。高名な魔法使いが五分も中二的な
詠唱を唱えなければならぬ爆炎魔法を一瞬で発動できたのだ。

魔力を使ったからか、少し疲れた。赤ん坊の俺はルドルフに身を任せてさっさと寝てしまうこと
にする。きつと、帰宅すればクリスティーナから説教を受けることだろう。俺でなくルドルフが。



我が家に帰ると、案の定ルドルフはクリスティーナから怒られた。

「何を考えているの！ あんな危険な魔法を森で発動するなんて」

「ご、ごめん。魔法の実験に失敗してさ」

ルドルフはいかにも反省している風を装う。胎児の時の十ヶ月と、生まれてからの七ヶ月ぐらい
の付き合いで分かっているが、この男はあまり反省していない。いや全くと言っていいだろう。

ルドルフは魔法を追究するためならば、何を犠牲にしようと省^{かへり}みることなど一切ない。流石^{さすが}に家
族まで犠牲にしないと思いたいけれども。

「そ、そう。失敗したなら仕方ないわね。でもルドルフが魔法で失敗するなんて珍しいわね」

こんな下手な言い訳で納得してしまうのは、まだ少女と言える年齢のクリスティーナがルドルフに心底惚れているからだろう。

「でも何か変っているのか……爆炎系の魔法はルドルフの魔力じゃなかったような……」

げっやバイ。クリスティーナも優秀な魔法使いだ。ギガエクスプロージョンは完全に感知されている。魔力の質がルドルフのものではないと気がついてるのか。

本来ルドルフは、真面目な正直者なんだと思う。クリスティーナに疑われ、もう目が泳いでいた。「まさか。ひよつとしてあの爆炎魔法はルドルフじゃなくてレオがやったの？」

「え、いや、そんな……赤ちゃんは魔法なんて使えないよ」

ルドルフ……もう少しマシな言い訳をひねり出せないものだろうか。

しかし、俺も人のことは言えなかった。

今、俺はクリスティーナに抱きかかえられている。そのクリスティーナの綺麗な瞳が俺の目を覗き込むが、俺の目はきつとルドルフのように泳いでいることだろう。我慢できなくなつて俺は顔を背けてしまった。

バレたな……怒られる。

「私の息子は何て優秀なのかしら！」

——と思ったが、女神のような母さんに頼ずりをされるだけだった。

「まだ一歳にもなっていないのに爆炎魔法だなんて。この子は言葉が分かっているような節もある

し、賢いから魔法もできたのね。どんどん訓練させましょう」

どうやら母も父と同じで、少しズレた感性を持っているらしい。

「そうだろう？ 教師がいいからね」

ルドルフは自分が褒められたかのように胸を張る。何も教えていないじゃないか。

クリスティーナはジト目でルドルフを見据えた。

「今度は私が訓練します。ルドルフが教えたらやり過ぎて危ないわ」

うーん。それも良いんだけど、母さんは転生の秘密を知らないからなあ。

魔法の訓練に関してはルドルフの方が都合良いかもしれない。

やっぱり、母さんの前では魔法はできないフリをしておこうか。



母クリスティーナ・コートネイは旧姓をヴァンテンブルクという。母さんはランドル王国の従属国であるベルンという国のヴァンテンブルク王家の王女だった。

大国であるランドル王国に対して、周辺の弱小国の王室や貴族は行儀見習いの名目で人質を送り、その見返りにランドル王国の庇護を受ける。

クリスティーナもそういった人質として送られた王侯貴族の一人だったということだ。

父ルドルフはそれら各国の王侯貴族に魔法を教える指南役で、クリスティーナにも魔法を教えていたというわけだ。

その頃既にルドルフは、新しい魔法体系の構築や危険な魔物の討伐、新しいアーティファクトの開発といった功績で、若くして世間から大賢者と称されるようになっていた。

国内でも類を見ない魔法の才能を持つルドルフはいつしか英雄視され、ランドルの王家筋の貴族ではないのにもかかわらず、宮中で異例の出世をしていた。

面白いのは旧来からの大臣たちである。

自分達の立場や利権が脅かされると感じた彼らは結託して、ランドル王に入れ替わり立ち替りルドルフの危険性を説いた。

当初ランドル王もルドルフのことを高く評価していたので、そのような意見は撥ね付けていた。

ところが、毎日のように別々の人間から悪しざまに告げ口をされ、王も不審に思いはじめた。そもそも王のように上に立つ者にとっても過度に人気のある部下は危険なのだ。

研究一筋で宮廷内の勢力争いにはまるで興味がなかったルドルフは、そういう人の心の機微が全く分からなかったようで、王の態度が変わってもいつも通り接してしまう。

その結果、ルドルフは彼を疎んじる大臣たちの手によって、ありもしない反逆罪の疑いをかけられてしまうことになった。

クリスティーナを含むルドルフの生徒達や同僚の何人かが口添えしてくれたため、疑いは晴れたが、貴族としての身分は剥奪され、庶民に落とされてしまった。

だが、迂闊にもルドルフはそれで全てが終わったと勘違いし、ランドル王国の王都为平民として暮らしはじめた。

肝を冷やしたのはルドルフを失脚させた大臣達だった。王都に居座るルドルフが、いつ復讐を企てるか分からないと怯えた大臣達は、市井でも再三ルドルフの命を狙ったらしい。

こうしてルドルフはランドルの王都から逃げることになったのだった。

そのルドルフを駆け落ち同然で追いかけた少女が一人。当時十六歳だったクリスティーナである。理由はもちろん、ルドルフを愛するがゆえ。

ところがその結果、クリスティーナの実家であるベルン王室のヴァンテンブルク家は、娘を盗られた上に宗主国との関係が悪化しかねない事態に陥り、怒り心頭である。

以来、ルドルフはランドル王国の大臣達、クリスティーナに恋慕していたランドルの王子達、及びベルン王室からも命を狙われることになった。

父はただ魔法を窮めようとしただけ、母はただ父を愛しただけなのに、結果的に二つの国家の重鎮を軒並み敵に回してしまったのだ。

これが俺とマリーが生まれる数年前の話だった。

今でも刺客に狙われることはあるが、密かに二人に協力する者もいたし、そもそも二人とも超強力な魔法使いなので、今のところは追手を楽に退け続けている。

初めてその話を聞いた時は、父も母も何て世間知らずなんだと思ってしまった。

でも、二人が駆け落ちしたおかげで、今ここに自分がいるとも考えられる。

それに、二人は世間知らずではあっても、人として間違ったことをしたわけではないのだ。それどころか、ひょっとしたら誰よりも正しかったのかもしれない。

俺はまだ赤ん坊だけでも、二人の足を引っ張りたくない、という思いで魔法の訓練を急いだのが……結果、森の一部を焼き払ってしまったわけだ。

悪気は全くなかったとはいえ、焼けてしまった森には動物もたくさんいただろう。

「あうあうあー（ごめんなさい）」

クリステイナが心配そうに微笑む。

「レオは何だか悲しそうじゃない？」

ルドルフはそれに答えた。

「分かっているよ、レオ。レオの気持ちは分かっているから、大丈夫だよ」

言葉は話せなくても、俺の気持ちは二人に伝わっているようだった。



ルドルフが真剣な表情で削った木を磨いている。

「あうあうあー」

俺が近付いて、既に磨き終わった木に手を伸ばすと、ルドルフは大概で取り上げてしまう。

「頼むから壊したりしないでね」

コートネイ一家の生計は、父ルドルフ・コートネイが支えている。

彼はお世辞にも恵まれた体躯とは言えないため、この世界のほとんどの人が従事している農業や林業をするのは無理であった。

かつては王族相手の魔法教師をしていたものの、追放されてからはそれもできない。そこで彼はアーティファクト開発と製造で生計を立てていた。つまり、コートネイ家はルドルフが製造したアーティファクトを売って、その対価で食料や生活必需品を買っているのだ。

もともと、アーティファクトによる利益は一家四人の生活に必要な額を遥かに超えるものだ。それゆえ大部分はルドルフの魔法研究の資金になっていた。

アーティファクトとは、一言で言えば人工的に作られた魔法のアイテムだ。生活を便利にするものから魔法使い用にフルカスタマイズされたものまで数多く存在する。

生活に役立つアーティファクトと言えば、魔力に反応して光る草——この世界では結構何処にでも生えている——を透明な樹脂で覆った「スターブローチ」などがある。

実はこの世界では、魔法を使える人は少ないのだが、魔力自体は誰でも持っている。魔法を使えない人でもスターブローチを手に入れば、持ち主の魔力に反応してほのかに光り、手元を照らすことができるのだ。電気による照明がないこの世界ではめちゃくちゃ便利だから、スターブローチは飛ぶように売れている。

ルドルフが地球の科学技術に大きな関心を示したことからも分かるように、この世界の科学技術や文明の水準は地球に比べてかなり遅れているようだ。詳しくは分からないけれど、中世のヨーロッパぐらいじゃないかと思っている。

ちなみに、スターブローチを開発したのは、他ならぬルドルフだ。この世界では特許などという制度はないので、誰かに真似されれば終わり。逆に言えば、製造法を知られるまでは好き勝手に儲

けられるというわけだ。しかし、性格的に考えて、ルドルフにそんな商売っ気はない。そもそもルドルフは基本的には魔法の研究以外は指一本動かさない人間なのだ。

そこで、ルドルフの友人でもある大商人ヴァスコさんが仲介して、元タルドルフが自分用に作ったアーティファクトを商品化し、大儲けしているのである。

幸いにして、ヴァスコさんはアーティファクトの売買で得た対価は必ず支払ってくれる人だった。スターブローチの販売だけでも、普通の人間なら一生遊んで暮らせるほどの額がルドルフに渡されているらしい。

もつとも、その巨額のお金を二、三日で使ってしまったりするのがルドルフだった。本来それを止める役割のはずのクリステイナも、ルドルフのやることを微笑みながら見守っているだけだ。元王女だけあって、金銭感覚が世間と大きくずれている。

ヴァスコさんは時々新しい儲け話の種を探すべく、丘の上の我が家に一人でやって来る。俺やマリーのこともよくあやしてくれるし、商売のことを抜きにしても人間的に良い人だと思う。

魔法使い用にフルカスタマイズされたアーティファクトのほうは、一品物の超高級品だ。俺が魔法で吹き飛ばしてしまった万年樹の杖もそれにあたる。

「聖域」と呼ばれる場所に一面生えている、成人男性の背丈ほどの高さの「千年樹」という樹木がある。聖域はこの世界特有の危険生物「魔物」^{モンスター}の溜まり場になっていて、千年樹の木を手に入れるのはよほど強力な魔法使いか戦士のみだった。

千年樹の中には、極々稀に「万年樹」というものが育つ。見た目はそっくりで区別をするのはと

ても難しいらしい。その万年樹をもとに作る魔法の杖が「万年樹の杖」で、この杖には魔法の発動を早めコントロールを補助する効果があった。

そもそも千年樹で造った杖にもそういった効果があるのだが、それらの中に段違いの効力を持つもの——つまりは万年樹——があることを見つけたのは、ルドルフの祖父らしい。

これはコートネイ家の秘密だ。

この世界では、アーティファクトの開発者や作成者を「アルケミスト」と呼ぶ。

ランドル王国に追われるなど、何かと敵の多いルドルフは、アルケミストとしては本名を名乗らず、「ゴールデン」と名乗っている。世間で持てはやされる謎のアルケミスト、ゴールデンの正体は、ルドルフだった。

ゴールデンの作品は、ヴァスコさんが王侯貴族や高名な魔法使いに販売している。

「ゴールデン」シリーズの千年樹の杖は他のアルケミストが製作したものよりも何倍も性能が良いという触れ込みだ。何のことはない、それは千年樹の杖ではなく万年樹の杖なのだ。性能が良いに決まっている。売りたいくないと渋るルドルフを、ヴァスコさんがあの手この手で説得して引き取ったものだ。

ともかく、そういうレアな素材を元にフルカスタマイズされた一品物のアーティファクトも存在するのだ。ルドルフが熱心に研究しているのは、こちらの方だった。

スターブローチのように、誰でも手に入る素材を使い、製法を知ってさえいれば誰にでも作成できるアーティファクトの対極。選ばれた人間しか手に入れることができない素材で、選ばれた人間

しかできない作成方法でアーティファクトを製造し、それを売買したお金で更に魔法研究を進める。ルドルフはそうして、日夜研究に没頭していた。

4

「レオー。おウマさんになって」

「ええ？ また？」

三歳になった俺の日課は、愛しの妹マリーのおウマさんになることだ。

異世界広しといえども、三歳児のおウマさんになる三歳児がいるだろうか？

「あらあら、いいわね。マリー」

クリステイナーが家事をしながら笑う。

我がコートネイ一家はランドル王国の勢力圏外であるイグロス帝国の片田舎^{かたいなか}、グマン村に引越していた。引越しの理由は俺の爆炎魔法。あの魔法による山火事で、ランドル王国の大臣にルドルフがあのだりに住んでいるのではないかと疑われてしまったからだ。

クリステイナーはランドル王国と敵対しているイグロス帝国に身元を明かして匿^{かくま}ってもらおうと主張したが、宮中の権力闘争で破れた経験のあるルドルフはそれを望まなかった。

結局、俺達の一家は帝国の秘境とも言われるグマン村に居を構えた。もちろん、グマン村でも

「コートネイ」という家名は名乗っていない。ただ単に、よくある名前である「ルドルフさん一家」と呼ばれていた。

俺としては田舎でも不便を感じたことはない。同年代の友達は全くなかったが、まだ三歳ということもあったし、いつも妹のマリーを遊び相手としていた。

欲しいものはルドルフに頼めば大体何でも作ってくれるし、お小遣いも要求すれば無頓着^{むとんちゃく}にくれる。

アーティファクトを買い取ってくれる商人のヴァスコさんも、ルドルフを追ってグマン村に引越して来てくれた。もっとも彼は、ルドルフが売れるアーティファクトを作り続ける限りは、何処に住んでいても手紙を出せばすぐに来てくれるだろう。

目下のところ、田舎で困ることは食べ物にバリエーションがないということぐらいだろうか。

だが、三歳の俺は、どの道まだあまり固いものを食べられない。それに、俺は一歳半ぐらいまでクリステイナーの乳を吸っていたのだ。

一歳ぐらいからルドルフが「母乳はもういいだろう」とうるさかったけど。

このところルドルフは、本格的に地球の科学技術とこの世界の魔法技術を融合させる研究に入っている。既に様々な新魔法や新アーティファクトが開発されたようだ。

「うげえ」

おウマさん——俺のことだが——はマリーの重さに潰れてしまった。当然だ。いかに魔法の才能があっても筋力は三歳児なのだ。同じ大きさの人間を長時間支えられるわけがない。正直くたく

ただ。

「レオー。もつともつとー」

それでもマリリーにくりくりの目を潤ませておウマさんをせがまれると、どうしても無理をしてしまふ。ああ、マリリーなんて可愛いんだ。成長したら女神のようなクリスティーナを超えるかもしれない。

最近ではマリリーに普通のスキんシップを避けられるようになったので、おウマさんが唯一の……頑張ってみたが、またすぐにベシヤツと潰れてしまった。

「マリリー。あんまりレオに無理言っちゃダメよ」

クリスティーナが洗濯物を干しながら言った。

マリリーは三歳児なのに賢いので、母親に言われたことをすぐに理解する。俺も三歳児だけどね。

「じゃあ、レオ、もいいこー」

——グマンの森か。

グマン村周辺が帝国の秘境と言われているのにはわけがある。帝国内部にありながら帝国に従属していない猫型の獣人が住む森がすぐ隣にあるからだ。

この世界には“垂人”と呼ばれている知的生物がいる。姿はほとんど人間なのだが、尻尾が生えていたり、獣のような耳が生えていたりするらしい。

俺も遠目に見かけたことはあるが、会話したことはないし、彼らのことを詳しくは知らない。ちなみに、この世界では“人間”はすべて共通言語だ。これは、古代この世界を統一したマドニア

アという大帝国の影響である。マドニアは世界を統一し、統一言語、統一通貨、統一単位を強力に押し進めたのだ。やがて、マドニアは分裂して滅んだのだが、統一言語や単位といった恩恵は今も残っている。

一方で、マドニアは獣人をはじめとする亜人を人間とは区別して弾圧した。そのため獣人達は人間と同じ統一言語を使っていないのだ。……今でも一部で獣人差別が残っているみたいだね。

ただ、猫型獣人は人間に敵対的な亜人ではない。むしろグマン村の村人とはたまに食料を交換し合ったりするような関係にあるらしい。

「じゃあ行ってみようか。マリリー」

「うん。いくー」

グマンの森には、亜人はいても魔物はいない。

この世界では魔力を持ち、人間を襲う生物を「魔物」とか「モンスター」と呼んでいる。人を襲う種類の動物であっても、ほとんど魔力を持たなければ厳密にはただの危険な野生生物とカテゴライズされるため、「魔物」とは呼ばない。ちなみにグマンの森には危険な野生生物もない。

だから俺は、グマンの森なら安全だろうと判断したが、当然、三歳児の母親はそうは思わない。

「ちょ、ちょっと！ 二人だけで森なんかに行っちゃダメよ」

「でも、レオがもうおウマさんはできないっていうしー」

クリスティーナがアーティファクトの図面を書いているルドルフに声をかける。

「パパ。レオとマリリーが森に行きたいみたいなの。一緒に行ってみてあげて」

「ええ？ 今、魔法で飛ばす人工衛星アーティファクトの図面がイイところなんだけどな」
ルドルフは渋ったが、クリスティーナから「最近の研究ばかりで家族を蔑ろないがしにしている」と指摘されると、ようやく立ち上がった。

ほんとだよ。ルドルフは一体何を作るつもりなんだろう。

「じゃあ行こうか」

そう言っつて、ルドルフはマリーを抱き上げる。俺は歩きか。

まあ、魔法使いにも体力は必要だ。子供のうちから体を鍛えておくのは悪くないだろう。

俺達は三人で家を出て、森を目指す。

猫型獣人の森は入口までなら何度も入ったことがある。俺がルドルフとこつそり魔法の訓練をしている場所もその辺だ。

訓練を続けて分かったのだが、俺の魔法の才能は大賢者と言われている父でも舌を巻くほどのものだったようだ。

だが、弱点もあった。威力のコントロールがほとんど利かないのである。いつでもその魔法の最大威力をぶっぱなしてしまう。

前のように辺り一帯を焼き払ってしまうようなことは流石になかったが、このグマンの森でも住んでいる獣人を相当驚かしていることだろう。迷惑をかけているのは自覚しているので、今はルドルフが作ってくれた魔力を封じる結界の中で訓練している。

本当は早く魔法の威力のコントロールを覚えたいのだが、「威力を抑えるなんて勿体もったいない。それ

は後にして今は魔力を伸ばそう」というのがルドルフの主張だった。

ルドルフは王族の魔法指南役だったのだ。言うなれば魔法教師の頂点である。ここは反発せずに言われたことをそのまま全力で吸収する方が良いのかな、と思う。

……そんなことを考えている間に、森の入口に到着した。この辺はまだ陽光がタツプリ入る場所で、木々や地面の苔こけが青々としていて美しい。

ルドルフは心ここにあらずといった様子で、何やらブツブツと呟つぶやいていた。

「衛星アーティファクトが実現すれば、理論上は半径三十キロ以上の索敵さくてきと先制攻撃が可能になるはずだ」

……。話題を変えた方が良さそうだ。

「マリーはどうして森に来たかったの？」

「うんとね。ねこさんとおはなししたかったの」

え？ ねこさんって、ひょっとして獣人のことだろうか？



「マリー。ねこさんって獣人のことか？」

マリーに尋ねると、ルドルフが急に素っ頓狂とんきやうな声をあげた。

「そうか！ ゴーレムの人工知能を応用すれば、衛星アーティファクトの自動制御の問題を解決できるかも！」

どうやら、先ほどからルドルフをうんうん唸^{うな}らせていた問題の解決策を思いついたらしい。

「レオ、マリィ。ちよつと設計図を取ってくるよ。二人とも、僕が戻るまでここで待っていていられるよね?」

マリィが元氣よく答える。

「うん!」

「じゃあすぐに戻ってくるから。レオ、マリィを頼んだよ」

三歳児を森の中に置いて行く氣か、この親は。

マリィを俺に任せてルドルフは家に戻ってしまった。……まあいいか。

ルドルフが駆^かけていく足音が聞こえなくなり、やつと静かになったと思っていると、いつの間にか俺達は何十四もの猫に囲^{かこ}まれていた。

「げっ。何だこれ!」

一応俺は、攻撃的な魔力を持つ生物……つまりは魔物を感知する魔法を展開しているつもりなのだが、まだ慣れていないから失敗してしまったのだろうか。

いや、たとえそうだとしても、ルドルフやクリスティーナが感知に失敗するとは思えない。グマンの森の入口なら十分に二人の感知範囲だと思うが、両親がやって来る氣配もないのだ。どういふことだろうか。

俺はマリィを背後に庇^{かば}いつつ、猫達を魔法で迎撃^{げいげき}できる態勢をとった。

ところが、マリィは俺の前に出てしまう。

「あ、マリィ駄目だ!」

マリィが急に猫の鳴き真似をする。

「にやにやにやにや」

へっ?

すると、マリィの声に呼応するように猫達も鳴きはじめる。

「にやにや」

「にやつにやつにやつ」

ひよつとして……

「マリィ。この猫達と話しているのか?」

「うん。そうだよ」

マジかよ。ただの猫か山猫に見えるけど、こいつらは猫型の獣人でこの鳴き声は獣人の言語なんだろうか?

それなら、マリィが猫型獣人の言語を使って猫と会話していると解釈できる。

「この猫達って獣人なの?」

「じゅうじんってなに?」

俺も獣人に詳しいわけではない。遠目で耳や尻尾が生えている人間を何度か見ただけだ。

「いや、俺もよく分からないんだけど、猫達は人の姿に変身できたりするの?」

立ち読みサンプル
はここまで

「きいてみるね。にやにやにやーにやにや？」

猫語にしても猫型獣人の言葉にしても、それを話せるマリィはどうなっているのだろうか。
「ただのねこだって」

マリィが猫の答えを通訳してくれる。

「そうなのか」

「でも、じゅうじんのむらにつれていってくれるって」

「マジか？」

猫耳、尻尾のついた獣人か。女の子の獣人もいるのだろうか？ それはちよつと会ってみたい。
でも、猫と話せるのもマリィの妄想かもしれないなあ。逆に、本当に猫型獣人の村に行くことができれば、マリィが猫語を話している可能性が高まるが。

「レオ。いこー？」

「う、うーん」

俺は危険性も考えて躊躇^{ちゆうちゆう}していたが、マリィはさっさと数匹の猫についていってしまう。
確かに、猫達はマリィを案内しているように見えるし、感覚的には危険な感じはしない。村にいる獣人もいい人かもしれない。ええい！ 行ってみるか。

太古には、人間にも目の前の生物が敵かどうか見分ける本能ぐらいはあったはずだ。

不意に、元の世界のイギリスに「好奇心は猫を殺す」という諺^{ことわざ}があったことを思い出す。過剰な好奇心が原因で命を落とすこともあるのほどほどにしない、という戒めだ。

